式等については、読者のご意見・要望などを踏まえ、編集委員会の審議を経て変更する場合がありますのでご了承ください。

**送付の宛先等**

メールアドレスは、
henshu@rikushukaikosha.or.jp
手書き原稿等の場合は、住所：〒160－0002 新宿区四谷坂町12－22 VORT四谷坂町5F 陸修偕行社編集委員会宛に郵送、またはFAX03－6380－0624まで送信願います。

締切日は、「1・2月号」の場合は、11月20日です。各号は同様に、前々月の20日が締切日となります。

**投稿に関するご質問**

編集委員会にお問い合わせください。電話03－6380－0623

## 豆の町（ビーンタウン）からこんにちは（第6回）

会員家族　住井　円香

**■新学期スタート、新ストライキもスタート**

日本でも多くの学校で夏休みが終わり、授業が再開する9月。その第1月曜日は、アメリカでは国の祝日になっています。19世紀後半に、ニューヨークの大工が労働時間の短縮と賃上げを求めて、一般市民にも労働者問題への認知度を高めるために始めた労働祭などの活動が全米に広がりました。それがやがて、労働者のアメリカ経済への貢献をたたえる「レイバー・デー」に定められることになったようです。

さて、そのレイバー・デー翌日からボストン大学でも新学期が始まりました。しかし、こちらは、大学側と労働者の交渉はなかなか進んでいないようです。以前触れた、教授を補佐したり、学生の質問に答える大学院生が務めるティーチング・アシスタント（通称TA）によるストライキですが、今のところ、前学期ほどの勢いはないような感じに見えます。それでも、解決に至っていないため、ストライキに参加や協力をしているTAはまだ少なくなく、現在も私が受講している中級ミクロ経済学のクラスでは、TAによる週1回の少人数授業が無期限中止となって

います。

また、中止とはなっていないものの、哲学のクラスのTAは、授業開始前にホワイトボードを使って、TAをはじめとする大学に雇用される大学院生によって組織される労働組合の宣伝をしていたことも印象に残りました。

ただ、ストライキの影響が長引くことで、当初はTAの権利の主張を好意的に受け止めていた学部課程の学生たちの支援の声にも陰りがみえてきました。大学非公式のオンラインの掲示板では、TAの授業や学生対応がなかなか再開されないことをつぶやいている学生の不満も見かけました。

そんな中、今度は学生寮を管轄するオフィスで働くアルバイト、「レジデント・アシスタント」(通称RA)たちによるストライキも始まりました。RAの仕事には、部屋の鍵をなくした寮生への対応といったものから、寮生同士のトラブルの仲裁などが含まれます。責任も大きいのですが、ほとんどの学生が高額のために住むことができない一人部屋に、寮費・食費が無料という扱いで入居できるなどメリットも大きく、志願倍率の高いキャンパス内アルバイトの一つです。

しかし、一般の学生にとって、こうしたRAはそもそも高待遇を受けているように見えやすく、また、肝心の困ったときにRAがきちんと助けてくれなかったり、対応してもらえなかった経験を持つ寮生もいます。そのため、多くの学生たちは、RAのストライキには、TAの活動に対する視線よりも、いささか冷たい反応を向けているように感じます。

## ■世間からの隔離と大統領選挙

11月に、4年ごとに実施される大統領選挙が行われます。アメリカでは、ドーナツをつまみに、家族や友人などでテレビを囲みながら、わいわいと賑やかに選挙の行方を見守るという景色も定番のようです。

ボストン大学では前の学期まではストライキの話題が盛り上がっていましたが、徐々にテレビ討論会などを機に大統領選挙のトピックも熱を帯びてきました。

ボストン大学では、大学入試選考過程において、出願者の課外活動として、貧困や社会課題などに意識を持った活動が評価に反映されるためか、選挙戦に関してもボランティアなどの実際の行動に移している学生が多くいます。また、多様性を重視する校風からか、革新派を支持する傾向が強く見えます。

また、人種や国籍、信仰する宗教が多様なのに対して、学生が持っている政治的な考え方そのものはあまり多様性がないという側面もあるようです。そのため、大統領選挙をめぐる議論をしていても、否定よりも賛同だけになってしまい、物足りないという声も聞きました。

昨年、3人部屋の寮に暮らしていた時には、ルームメイトの一人が、「この部屋に住んでいる人の中で、何かの間違いで、共和党に鞍替えする人がいたら誰だろう」とごく当たり前のように言っていました。私はアメリカで投票権を持っていないですし、特に政治的発言をしたことがないにも関わらず、そのルームメイトが、部屋の全員が民主党支持者であるという認識を持っているということがうかがえ、とても印象に残りました。

大学の所在地であるマサチューセッツ州や、ほかにもカリフォルニア州、ニューヨーク州といった伝統的に民主党支持の州出身者が学内で存在感が強いことも、大学での政治的意見が均一化する理由の一つになっているのかもしれません。そして、それだけに、アメリカのさまざまな層の視点を得ることが難しいということになっているようにも感じます。

ボストン大学の学生として占める割合が高くない南部出身者たちは、大統領選挙の結果が連邦政府の人工中絶政策に及ぼす影響に注目しているようです。ご存じの方も多いと思いますが、アメリカには連邦政府の法律の他に、各州が定める法律があります。以前は、中絶を禁止した州の法律は連邦最高裁判所に「違憲」判決を下されていましたが、近年連邦最高裁がその判断を覆したことをきっかけに、南部や中西部の州では中絶を規制する法律を可決させるなどの動きがあります。

民主党大統領候補のカマラ・ハリス氏は、中絶の権利を擁護する連邦の法律の制定を掲げているほか、人工中絶反対派からの支持を集める共和党候補ドナルド・トランプ氏も、犯罪に巻き込まれたり、健康に悪影響がある場合には中絶を例外的に認

めることや、連邦法で中絶を禁止せずに各州の判断に委ねるという発言をしています。

生命に関わる話題は、アメリカ全体だけでなく、保守派の中でも意見が大きく割れるトピックなので、今後どのように変わるのか。それとも変わらないのか。普段耳にすることが多い北部的な主張だけでなく、できるだけ南部の人の意見にもアンテナを張って、今回の大統領選期間を過ごしていきたいと思いました。

## ■ボストンと言えば…？

この連載のタイトルにもある「豆の町（ビーンタウン）」といわれるように、ボストンの郷土料理は豆を使った料理です。でも、どちらかといえばボストンと聞くと、シーフードを思い浮かべる方もいるのではないかと思います。

実際、ボストン東部の港の近くでは、海鮮料理を提供するレストランや市場が多くあります。北大西洋産のアトランティック・サーモンや、かつてはマサチューセッツ州に属していたアメリカ最北東部メイン州のウニなども人気です。

それ以上に有名なのは、ロブスターです。スーパーマーケットのエコバッグのデザインにもロブスターが描かれていたり、可愛いかどうかはともかく、お土産としてぬいぐるみも売られています。

ボストン大学では、年に1回、9月に「ロブスター・ナイト」と呼ばれるイベントがあります。どの食堂でもロブスターが用意され、昨年参加した時には長蛇の列ができていて、席を見つけるのもやっとでした。ロブスターを好まない人や、アレルギーがある人のために別のメニューも提供され、強制的に食べなければいけないわけではないので、食の嗜好などに関わらず誰もが楽しめるように工夫されていると感じました。

しかし、その年にたった1度しかない食堂の大イベント当日に、私はマーチングバンドの練習と重なり、ロブスター・ナイトの参加が難しそうな状況に追い込まれてしまいました。このまま、口にできないなんてことになっては残念でなりません。練習をこっそり抜け出して、なんとか食べに行く方法がないか、目下思案しているところです。